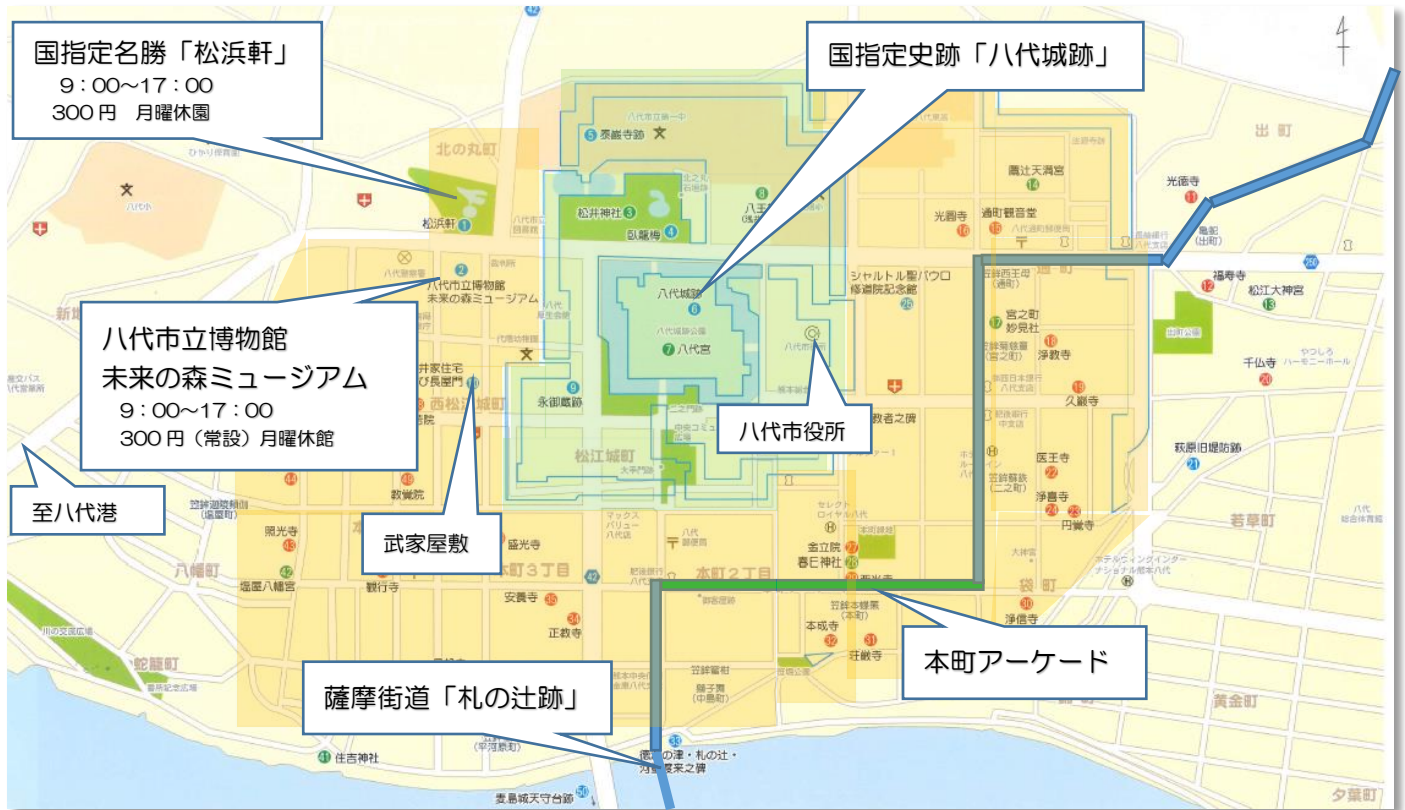


城下町の名残をとどめる八代市中心市街地のご案内

は八代城の範囲
 は八代城下町の範囲
 は薩摩街道



八代城と八代城下町について



八代城本丸の表枘形（入り口）

現在、八代市の中心部に本丸跡を残す八代城は、熊本藩主加藤忠広（加藤清正の子）が築いた城で、元和8年（1622）に完成しました。元和元年（1615）、江戸幕府は一国（一藩）に城は一つだけとする一国一城令を出しましたが、熊本藩では、特例として熊本城と八代城の二城が残されました。当時の八代城は、球磨川の中州にある麦島にありましたが、元和5年（1619）の地震で倒壊したため、幕府の許可を得て現在地に再建されました。一国一城令や地震による倒壊後も、八代に城が置かれたのは、この地が陸海の交通の要衝であり、古くから海外貿易が盛んな港であったことや、九州南部の大藩島津氏や異国船の来航を監視する重要拠点と位置づけられていたためと考えられています。

八代城の周りには、武家屋敷や町屋が置かれ、城下町が形成されました。町の中を薩摩街道が通り、熊本城下の熊本町に次ぐ城下町として栄えました。今も、城下町時代からの寺社が数多く残り、城下町の面影を随所に見ることができます。

明治13年（1880）八代城本丸跡に創建された八代宮は、南北朝時代に征西将軍として活躍した懐良親王（後醍醐天皇の皇子、八代に御墓がある）をまつています。



八代城本丸に建つ八代宮社殿

八代城を治めた人々

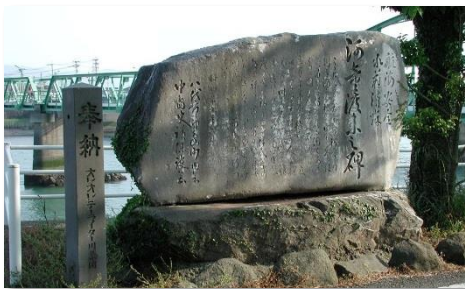
八代城を築いた熊本藩主加藤忠広は、徳川家光の時代

となった寛永9年（1632）、改易（領地没収）され、代わりに小倉藩主の細川忠利が熊本藩主に任命されます。忠利は熊本城に入り、八代城には忠利の父三斎が入りました。三斎は隠居前の名を忠興といい、妻は明智光秀の娘玉（洗礼名ガラシャ）です。千利休の高弟で「利休七哲」の一人ともいわれました。三斎が晩年を過ごした八代城北の丸跡には、三斎が植えたとされる梅の古木「臥龍梅」が今も風格ある花を咲かせ、三斎を茶毘に付した泰勝院跡には、三斎が建立した織田信長供養の五輪塔が残っています。

正保2年（1645）、三斎が没すると、細川家の筆頭家老で、幕府からの信任も厚い松井家が八代城を任せ、以後明治まで10代25年にわたり、松井家が八代城と城下町を治めました。松井家は、三斎が復興した妙見祭（国指定重要無形民俗文化財）のいっそうの保護奨励を図り、庭園「松浜軒」（国指定名勝）を築き、八代海辺の干拓事業を進めるなど、現在の八代の文化形成に大きな足跡を残しています。



薩摩街道の要衝 札の辻跡



徳淵津跡に建つ「河童渡来の碑」

薩摩街道と徳淵津

江戸時代、熊本城下から鹿児島へ向う主要道路は「薩摩街道」と呼ばれました。八代城の真南に位置し、前川（球磨川の支流）に面した一帯は、「徳淵津」と呼ばれ、古くから国内外との交易が盛んに行われていた港です。徳淵の地名は、徳（財宝）の集まる淵（港）という意味です。

ここは、薩摩街道上の要衝で「札の辻」と呼ばれ、熊本城下から十一里（一里は約4km）の距離であることを示す「十一里木」や幕府や藩からのお触れを掲示する「高札場」がありました。

徳淵津は、その昔、海外からやって来た河童が、はじめて日本に上陸した地点と伝えられており、「河童渡来の碑」が建てられています。

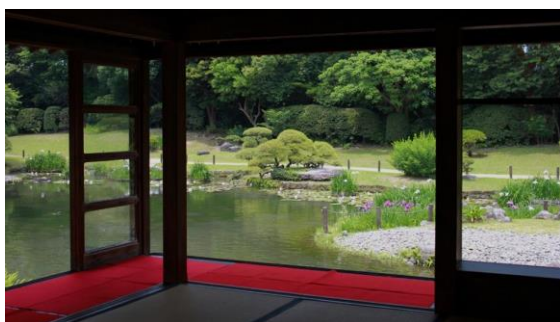
松浜軒のご案内

八代城の北西に位置する松浜軒は、元禄元年（1688）、八代城主松井直之が、母崇芳院尼のために建立した茶庭です。当時は、庭の北西側に松が植えられ、松波越しに八代海や宇土半島、さらには遥か雲仙まで望める雄大な眺望を持った庭園でした。

当時は海浜も近く、「松浜軒」の名はこれに由来しています。庭内にある池は、もともとこの地にあった赤女が池を取り込んだもので、池の中央には玉石を置いて海浜を表した中島や、深い山奥の趣を見せる築山などがあり、二階建の主屋にある書院からの眺めに考慮した配置となっています。



肥後花菖蒲の時期の松浜軒



松浜軒内の書院（通常非公開）から見た庭の景色

江戸時代には、藩主来訪時の接待や松井家遊興の場として用いられ、希望すれば上級武士は庭園の見学ができたそうです。主屋内にある茶室のほか、庭内にも「林鹿庵」「綴玉軒」などの茶室が設けられ、茶道を愛好した松井家らしい風情ある庭となっています。5月下旬には、熊本藩土の精神修養のため奨励された園芸ブームによって生まれた「肥後六花」の一つで

ある「肥後花菖蒲」が咲き誇り、これにあわせて行われる「肥後古流」（千利休の古式を伝える茶道）の茶会が、この季節の風物詩となっています。

昭和24年・昭和35年には、来熊された昭和天皇の宿泊・休憩場所ともなっています。随筆家内田百閒が、松浜軒を気に入って何度も宿泊し、その作品『阿房列車』に取り上げていることでも知られています。

松井家と松井文庫 松浜軒を作った松井家は、もともと室町幕府の将軍足利家に仕えていた家で、山城国（現在の京都府）の出身です。戦国時代、同じく足利家に仕えた細川家と行動をともし、松井康之が、細川藤孝（幽斎）の養女を妻として以来、細川家第一の重臣として活躍し、細川家が丹後国12万石、豊前小倉藩39万9千石、肥後熊本藩54万石の大大名へ成長するのに、大きな役割を果たしました。松井家には、戦国時代から江戸時代にかけての膨大な古文書や美術工芸品が伝えられており、これらは、昭和59年に設立された「財団法人松井文庫」によって保存公開されています。



松浜軒入り口の冠木門

松井文庫の名品としてよく知られているのは、豊臣秀吉が石見半国を与え、直属の家臣となるよう勧めたのを断って、代わりに賜った唐物茶壺（銘「深山」）やその話に感銘を受けた徳川家康から賜った水指（銘「縄簾」）、千利休が切腹する2週間前に康之宛に書いた手紙（利休絶筆）、晩年を熊本で過ごした宮本武蔵の書画や木刀などで、そのほか、茶道具や能面・能装束など、貴重な文化財が数多く所蔵されています。

ただいまの展示 松浜軒内の展示室では、季節ごとに松井文庫の名品を展示しています。7月～9月は、暑い夏に少しでも涼感を感じていただこうと「博物学へのいざない」と題し、「妖怪絵巻」と「朝顔生写図巻」を展示しています。とくに「妖怪絵巻」は、昨今の妖怪ブームの影響で雑誌などによく取り上げられ、全国的に有名な作品です。「ぬらりひょん」や「のっぺらぼう」などおなじみの妖怪から、「いそがし」や「どうもこうも」など、現代にも通じるユニークな名前の妖怪が58種描かれています。（H28.7～10.2）

▼松井文庫所蔵「妖怪絵巻」



いそがし



どうもこうも



ぬらりひょん



のっぺらぼう

▼松井文庫所蔵「朝顔生写図巻」



八代市立博物館未来の森ミュージアムのご案内

八代市立博物館未来の森ミュージアムは、八代の歴史や文化を、考古学や民俗学、古文書や美術工芸などのさまざまな角度から調査・研究し、展示する博物館として、平成3年開館しました。江戸時代の八代城や妙見祭の人形模型など、八代に育まれた歴史や文化を知ることができます。

近未来的な外観を持つ建物は、建築家伊東豊雄氏の設計によるもので、今や日本を代表する建築家として活躍されています。



八代市立博物館未来の森ミュージアム 外観



八代城城郭模型



八代妙見祭の神幸行事 人形模型

ただいまの展示

●松井文庫常設展示室「松井家の江戸参府」 (H28.9.13~10.16)

この展示室では、江戸時代、八代城主を務めた松井家に伝わる歴史・文化遺産(財団法人松井文庫所蔵)の中から、武家文化の精華ともいえる武器・武具、絵画・書蹟、調度品、能面・能装束などを、年間数回の展示替を行いながら、随時ご紹介しています。

現在は、松井家10代目章之が安政3年(1856)江戸に参府した際、絵師杉谷雪樵を同行させ描かせた江戸までの道中風景絵巻を紹介しています。



道中風景絵巻

●常設展示室 ～八代の歴史と文化～

熊本藩の御用窯で雅味あふれる茶道具を生産した八代焼(高田焼)、コレクターに人気の高い肥後罈や八代染韋、熊本のヒーロー加藤清正の実像を紹介する古文書、球磨川周辺に残るめずらしい風習「七夕綱」、弥生時代の出土品など、6名の学芸員による最新の調査研究の成果を展示し、八代の歴史と文化に対する理解を深めていただいています。



肥後罈(桜九曜紋透罈)



八代焼波文象嵌陶枕